

自己への問いとしての哲学

大沼栄穂 著

北樹出版刊

自己への問いとしての哲学

大沼栄穂 著



北樹出版刊

著者略歴

大沼栄穂（おおぬま・ひでほ）

1927年 北海道に生れる

1950年 東京大学文学部哲学科卒業

現在 日本大学教授

著書 「倫理哲学概説」（共著）中教出版

現住所 〒410 沼津市牛臥3025

自己への問いとしての哲学

・検印廃止

昭和55年4月1日 初版第1刷発行

著者 大沼栄穂

発行者 北野登

・定価はカバーに表示

印刷 誠和印刷／製本 小泉製本

発行所 有限会社 北樹出版 発売元 株式会社 学文社

東京都目黒区中目黒1-2-6 〒153 電話(03)715-1525(代表)

3010-350014-1023

(落丁・乱丁の場合はお取り替えます)

目次

第一章 自己への問いとしての哲学（精神危機の本質とその克服）

序 本論の執筆契機とその概要…………… 3

一 精神危機の本質（哲学の必然性）…………… 6

二 精神危機の様相（哲学の出发点）…………… 10

三 精神危機の克服（哲学の帰着点）…………… 19

四 精神危機克服の方法（哲学の方法）…………… 26

五 現代における精神危機の克服（哲学の効用）…………… 29

結 真の民主主義教育…………… 47

第二章 運命愛の倫理（哲学的幸福論）

序 問題の所在と本論の概要…………… 53

一 人生不可避の運命としての精神的苦境…………… 55

第三章 人類国家の理念（哲学的平和論）

二	運命の意味としての自由（世界の内面的原理）	58
三	運命愛の知恵と諸徳性（幸福への道）	61
四	福德知一致（ギリシャ哲学の幸福論）	65
五	信・望・愛（キリスト教の幸福論）	70
六	度一切苦厄（仏教の幸福論）	75
七	道は近きにある（中国哲学の幸福論）	79
結	理想社会（眞の平和）への道	82
序 問題の所在と本論の概要		
一	戦争の形而上的要因（総合的精神危機）	87
二	平和の形而上的基礎	89
三	平和教育論（自由人養成の三視点）	95
四	コスモポリス（ギリシャ・ローマ哲学の平和論）	99
五	神の国（キリスト教の平和論）	103
六	浄土（仏教の平和論）	106
		109

七	王道楽土（儒教の平和論）……………	111
---	-------------------	-----

結	政治・外交の本質と人間の自由……………	113
---	---------------------	-----

第四章 徳育と知育（哲学的全人教育論）

序	問題の所在と本論の概要……………	117
---	------------------	-----

一	徳育論議の本質……………	120
---	--------------	-----

二	全人教育の理念……………	123
---	--------------	-----

三	全人教育方法論……………	125
---	--------------	-----

四	知徳合一（ギリシャ哲学の全人教育論）……………	128
---	-------------------------	-----

五	律法と愛（キリスト教の全人教育論）……………	131
---	------------------------	-----

六	戒と慧（仏教の全人教育論）……………	135
---	--------------------	-----

七	礼と仁（儒教の全人教育論）……………	138
---	--------------------	-----

結	教育の国民的合意と哲学……………	143
---	------------------	-----

第五章 救済の論理（哲学的宗教論）

序	問題の所在と本論の概要……………	149
---	------------------	-----

一	哲学と宗教の關係……………	152
---	---------------	-----

付章

実践的倫社教育論

——自律的集團生活における目標設定について——

二 非哲学的救済観（宗教改革前夜）	158
三 哲学的救済観の回復（宗教改革の精神）	165
四 いわゆる哲学とよばれるものの宗教的性格について	174
五 宗教の自由（現代における宗教の問題）	177
結 哲学が常に再点検されねばならぬ理由	179
序 本論の要旨	183
一 倫社教育の理想と現実	185
二 自律的集團生活と目標の設定	192
三 寮生活の徳目と着眼（自己の評価の資料）	196
四 評価の問題	204
結 一億総教育評論家時代とマスコミの責任	207
あとがき（本書の特色と読み方）	209

第一章 自己への問いとしての哲学

（精神危機の本質とその克服）

序	本論の執筆契機とその大要	3
一	精神危機の本質（哲学の必然性）	6
	真理の存在と幸福（探求生活の必然性）	人生は苦である（人間の迷妄）
		不幸なる意識（迷妄の根源）
二	精神危機の様相（哲学の出发点）	10
	あやまれる幸福観	あやまれる平和観
	教育観	あやまれる宗教観
三	精神危機の克服（哲学の帰着点）	19
	人類の知恵（世界の内面的原理としての自由）	フィロソフィア
		信仰の生活
		菩薩道（波羅密多）
		君子の道（仁の実現）
四	精神危機克服の方法（哲学の方法）	26
	人間形成の論理	実践生活（法律的生活・公民的生活）
		理論生活（道德的生活・世界公民的生活）
		健康生活（芸術的生活・宗教的生活）
五	現代における精神危機の克服（哲学の効用）	29
	当面する特有問題の意義	正しい幸福観
	和観	正しい教育観
		正しい宗教観
		正しい平和観
結	真の民主主義教育	47

序 本論の執筆契機とその大要

「なんじ自身を知れ」という古典的表現で知られるところの哲学の究極課題はいったい何であらうか。

これが本論考の主たる執筆契機であり、表題を「自己への問いとしての哲学」とするゆえんのものである。

筆者によれば、それは、人間が自由であるということの真の意味を知る、ということのように思われる。また、人間が自由であることの真意を知ったときにおのずから可能となるところの、真理探求をよろこびとする力強い人生態度の確立のことであるように思われるのである。それはまた、全人的自己教育（徳性涵養）の努力そのものであるということができであろう。

以上のことは、ひとり筆者の考えであるというよりはむしろ哲学の歴史の帰結というべきものであり、子細にみるならば、ギリシャの昔から現代に至るまで、さまざまな言葉で広い範囲において語られてきたところの教育の究極概念であったことを知り得るのである。

しかしながら、この、人間が自由であるということが正確に如何なる内容のものであるかということになる、それはかたんに答えられないものであり、むしろ一人ひとりがかちと

ること以外には理解し得ないようなものであった。その本当の意味は、却ってそれを忘れることが一般化することによって起こった精神危機において改めて再認識される場合が多かったのである。それゆえ、われわれは、多少オーバーな方をすればこの精神危機が如何なるものかを反省することによって、この自由とは何であるかという永遠課題により容易に一步近づき得ると考えるのである。これが筆者（本論考）の独自のアプローチの仕方であり、かつその副題を「精神危機の本質とその克服」とするゆえんのものである。

以下にその要点を略記して、本論の序に代えたい。

（一） 人生に哲学が必然であるといわれる理由としての、従ってこんにちのわれわれもその例外に属さないところの精神危機の本質とは何か。それはわれわれが自由の正しい意味を見失っている結果陥っているところのあやまれる真理観のことである。すなわち、真理というものを主体と離れた単なる知識とみなす結果、「何をなすべきか」を問いつづけねばならぬ「探求生活」を苦しみとしか観じ得ない迷妄のことである。

（二） 哲学の出発点としての精神危機の様相とは何か。それは右記の迷妄によって元来よるこびであるはずの真理探求生活を放棄してしまうという弱い処世の態度が生み出すものである。例えば、それは幸福とは与えられるもの、平和とは保証されるものという消極的人生観に代表されるものであり、教育や宗教のあやまった役割が期待されるといった弊害のことである。

(三) 精神危機の克服とは、何よりもまず自由の正しい理解を意味するものであろう。それによって、人生に必然するわれわれの苦しみをよろこびに転換する努力を意味するものである。それは古来のすぐれた人類の知恵がひとしく指向してきたところの哲学の帰着点といふべきものである。

(四) 哲学というものをこのように見るとき、それは単なる「真理への問い」(学問)というよりむしろ「自己への問い」(生き方)なのである。それは全人的自己教育であり、その方法は自己の実存構造に忠実になること、つまり「真理探求生活」の深化徹底以外にないのである。こんにちにおける「徳育」「知育」「体育」は実は深い哲学史的背景をもったことばであることを再確認せねばならない。

(五) かくて哲学、すなわち人間の自由の正しい理解とは、探求生活の充実こそが人生の最大のよろこびであるという正しい真理観に他ならないが、そこから健康で力強いさまざまな処世の態度が約束されるものである。それは例えば、幸福とは不幸の回避ではなくむしろそれを克服すること、平和とは真に幸福な力強い個人が生み出すところの相互信頼関係であることを知らしめるであろう。また教育とはかかる幸福の創造、すなわち探求生活に支えられかつそれを助長するような全人的自己教育(徳性涵養)がその主軸であること、宗教とは「天はみずから助くる者を助く」という本来の救済観に帰り、「信教の自由」の正しい意味を明

らかにするものであることを知らしめるであろう。

以下この順に従って、論を進めることにしよう。

一 精神危機の本質（哲学の必然性）

人生において哲学が必然であるとされるゆえんの、従って現代のわれわれもまたその例外に属さないところの精神危機の本質とはいったい何であろうか。

われわれはそれを人間が自由であるということの真意を失い、「何をなすべきか」を問うこと（真理探求生活）を苦しみと観ずるところの迷妄である、と考えるものであるが、以下この迷妄について本節において検討してみたいのである。後述するように、「何をなすべきか」を問うところの真理探求の姿勢とは実は、何ものにも代えがたき人間の尊厳さを示すものであり、彼の自由であることを立証する以外の何ものでもないのであるが、本節に述べるところの迷妄により、われわれはそれを苦しみとして放棄しがちなものである。そこから、さまざまの精神危機の様相が露呈されて行くものである。

われわれは人生の必然としての真理探求生活とは何か、それは如何なる場合に苦しみとなるかということを以下二段に分けて取り組むことにしよう。

まず、われわれは前者のために、われわれの日常の意識において多く登場する「何をなすべきか」という問いの構造を分析することにしよう。

われわれが日常生活において、切実さの度合の差こそあれ「何をなすべきか」を自問自答する局面は極めて多いものであろう。一瞬一瞬がその連続であるとさえいい得るであらう。それは人生の倫理的・基本的現実であるといつてよい。このことは何を物語るのであらうか。

第一にいい得ることは人間というものが幸福追求の一環としてのなすべき何か、行為の何らかの基準（真理）を求めていることである。人間の行為というものが何らかの意味で幸福追求であるとすれば、それはなすべき何かがあるという真理存在の信念と切り離せないということである。カントが普遍的道德法則の存在は理性の事実である、というとき、それは人生のこの極めて基本的な現実を規定したものといいい得るのではあるまいか。

第二にいい得ることは、にもかかわらず、それがわからなくなる局面がこれまた極めて多いということである。人間の幸福を支えるところの真理の存在が自明であるにもかかわらず、それを知識として所有し得なくなるということなのである。真理認識の要求はほとんどの場合、失敗反応を示すということなのである。カントも先刻のことばに引き続き、普遍的道德法則の認識は経験的に不可能だといっているのである。

以上の考察から、次のような人間の実存構造が結論づけられるであらう。

人間は真理の認識を離れて幸福というものが考えられないがゆえに「何をなすべきか」を問いつづける——つまり真理探求の——生活をさけることが出来ない。

次に、この人間の実存構造としての真理探求生活は如何なる場合に苦しみと観ぜられるのかを考えよう。

なすべきことがありながらわからないという真理認識の失敗反応は多くの場合、善を欲しながら悪を避けることが出来ないという人間の行為の矛盾として受けとめられる。正邪・善悪に關する実践の挫折感、ジレンマとして受けとめられる。それは切実さの度合はあれ、多くは信・不信に關する人間關係のピンチ、苦境と隣り合わせなのである。

人生に苦しみが内在するとはよくいわれることであるが、その最大なるものは、何と云つても、以上のような態度決定に關する実践上のジレンマである。よいと思つたことがいつのまにか悪いものになっている。何かをしなければならぬがどうしてよいかわからないというケースである。態度の保留が認められるときはまだしも、その決断を迫られるとき、そしてそのことが多くの人々の生活や運命を左右するとき、その苦しみはひとしおであろう。

真理探求生活に必然するこの苦しみについては古来さまざまな表現がある。「理解は誤解のはじめ」「良法變じて惡法となる」「法の極みは無法の極み」「すべての善は制約を有す」「諸行無常」など真理概念の動揺・混乱を意味するものがあげられる。

さて、人生に苦しみは避けられないとして、この苦しみは果たして、どうにもならないもの、つまり人間の不幸そのものなのであるか。それとも、この苦しみは何らかの意味があり、その意味を知ることによって逆に幸福を見出すべきもの、つまり禍い転じて福となし得るものなのであるか。

われわれは後者の道をとるものであるが、その鍵を握る人間の自由については次節以後にふれることとし、ここでは、苦しみを直ちに不幸そのものとみなす人間の「迷妄」について書きとどめることにしたい。

「縁起への無明」とか「己れが愚痴」とか仏教的表現で知られるところの「迷妄」とは何か。われわれの表現によれば、それは元来自由のあらわれであり、従って連続の意識であるところの「何をなすべきか」を、反対に分裂せる意識として受けとめるところに存するのである。われわれはそのことをヘーゲルの所謂「不幸なる意識」を借りて確かめることにしよう。

ヘーゲルによれば、あらゆる存在意識は原理的に「不幸なる意識」である。その理由は、彼の表現によれば、それが主観的な極と対象的な極との間にアンチノミーを含んでいること、別のことばでいえば、恒常不変の世界の意識と有為転変の世界の意識との分裂を有していることによるのである。

ヘーゲルのこの指摘は、認識的にも存在的にも、理想と現実の分裂に悩む人間の実存の真相

をうがっているものであろう。われわれのいう真理探求生活も、その意味では、典型的な分裂の意識であるがゆえに、不幸な意識ということになるかもしれないのである。

しかしながら、われわれはヘーゲルのこの同じ表現の中に、次のような積極的な推論をも可能にすることができるのである。すなわち、不幸なる意識というものが分裂せる意識であり、それが原理的（必然）であるとすれば、この分裂ということの深い意味が了解されるに至れば、逆に不幸な意識が必然的に「幸福なる意識」に転化するというのがそれである。「不幸なる意識」が単に否定的、消極的にとらえられるというのでなく、それは止揚克服されるべきものであり、逆に幸福を生み出す真の機縁だということなのである。

「何をなすべきか」を問う姿勢は、決して分裂の意識ではない。「なすべきことがある」からこそ、「わからない」のである。それは「善を欲する」からこそ、「悪をなさざるを得ない」のである。真理探求は決して実践の挫折を意味するものではない。むしろ完成を意味するのである。それは、人間の自由の証しとして喜ぶべきものである。

二 精神危機の様相（哲学の出発点）

人間が（彼の必然としての）真理探求生活の意味を忘れる迷妄に陥るとき、いいかえれば「何